アディソンの「ピグミーと鶴の戦い」

海　老　澤　　豊

序

ジョウゼフ・アディソンがラテン語で書いた短詩「ピグミーと鶴の戦い」は,18 世紀前半の英国で流行した「戦闘詩」の先駆けとなる作品で,1698 年と 99 年に詩選集に収められた。[1] アディソンがこの詩を書く上で典拠としたのは, ホメロスの『イーリアス』第 3 巻の冒頭である。トロイア軍とギリシア軍が雌雄を決さんと戦場で対峙する場面で始まる。ギリシア軍が粛々と進軍する一方で, トロイア軍は雄叫びを上げながら進撃していく。その有様は「トロイア軍は鳥のような喚声と雄叫びを上げて進軍する, まるで冬の嵐と絶え間ない雨から逃れて, 大空に姿を現わした鶴の鳴き声のように, 鶴たちはオケアノスの流れに向かって飛翔しつつ喚声を上げて, ピグミー（ピュグマイオイ）族に殺戮と死をもたらす」と描かれる。[2]

マコーリーはアディソンの詩に「想像力とユーモアのきらめき」を認め, スウィフトのリリパット国の描写にヒントを与えたと推論する。[3] またボンドはこの詩におけるアディソンの歌いぶりは「疑似英雄詩ではあるが, 露骨でも極端でもない, 穏やかだが効果的な諷刺家」のそれだと指摘する。[4] さらにスミザーズはこの作品が「疑似英雄詩であり, ユーモアと情感の見事な才能を示して」おり, 主題の些細さはこの詩が「文体の優美さ, 描写の巧妙さ, 機知に富んだ表現」の練習である証左だという。[5]

だがティロットソンは, 疑似英雄詩を「叙事詩の形式だけでなく, 人間をも笑い者にする」ジャンルと規定し ,「ピグミーと鶴の戦い」における嘲笑が人間に向けられているとしても, それはあくまでも叙事詩の枠内に限定されており, この詩を疑似英雄詩の範疇に収めることはできないと主張する。[6] これを受けるように, ブロイッヒはこの詩が「ギリシア詩のあらゆる特徴を引き継いでいる」が, 疑似英雄詩との共通点はほとんどなく, そもそも疑似英雄詩は 1698 年の時点で英国では「前面に出ていなかった」と説く。[7]

この「ピグミーと鶴の戦い」が疑似英雄詩か否かという問題はさておき, 本論ではこの作品を「高遠な文体と卑近な内容の齟齬から生じるおかしみを狙った」バーレスク, とりわけその下位区分である「戦闘詩」として扱う。アディソンは『スペクテイター』第 249 号で, バーレスクについて以下のように書いている。[8]

> 著作における嘲笑の二つの大きな枝が, 喜劇とバーレスクです。前者では人々をそれにふさわしい人物として描くことによって嘲笑し, 後者は人々を似ても似つかない人物に描くことで嘲笑します。したがってバーレスクには二種類あり, 一つは英雄の装具をつけた卑近な人物を描出し, もう一つは人間に混じった獣のような言動をする偉大な人物を描出します。ドン・キホーテは最初の例で , ルキアノスの神々は二番目の例です。バーレスク詩がうまく流れるのが,『薬局』のような英雄詩なのか,『ヒューディブラス』のようなへぼ詩 (doggerel) なのかについては, 批評家の間で論争があります。私が思うに, 卑俗な人物が高められる場合は, 英雄詩体が適切な詩形ですが, 英雄が引きずり降ろされて卑しめられる場合は, へぼ詩がお似合いでしょう。

この定義に当てはめると,「ピグミーと鶴の戦い」は, ピグミー族と鶴がさながら叙事詩の英雄のごとく戦う作品であるから, アディソンがバーレスクの第一例としてあげる「英雄の装具をつけた卑近な人物を描く」や「卑俗な人物が高められる」に当たると言えよう。

1.「ピグミーと鶴の戦い」の伝承

ホメロスがトロイア勢の比喩として描いた「ピグミーと鶴の戦い」は，後世の著述家たちによって書き継がれていった。ここではハーンとオヴァディア＆ミュクズニックの調査を基に，古代および近世に書かれた記述を紹介する。[9]

アリストテレスは『動物論』第７巻で,「鶴はスキュティアの平原からナイル川が湧出するエジプトの湿原まで渡っていく。このあたりはピグミー族が暮らす地域である。彼らは神話ではなく，伝えられるように小さな種族（人も馬も）が実際に存在し，穴居生活をしている」と述べているが，両者間の戦闘についてはまったく触れていない。[10]

だがオウィディウスは,『変身物語』第 6 巻で神への敵対行為を 4 例挙げており,「二つ目の隅には,ピグミーの女王の悲運が示されている。彼女との争いに打ち勝ったユノーは，彼女を鶴に変身させたばかりか，かつて彼女が支配していた者たちと争うように命じた」という。[11]

プリニウスは『博物誌』第７巻でピグミーと鶴の戦闘について詳細に記している。ピグミーは３スパン（約 70 ㎝）しか背丈のない種族で,その領土は「山脈によって北風から守られているので，彼らは健康的な環境と常春を享受している」。またピグミー族は「春になると全員隊列を組み，牡羊や雌山羊にまたがって，弓矢で武装し，一隊となって海に下ってゆき，鶴の卵と雛を食べる。この遠出は三ヵ月かかる。そうしなければ彼らは成長する鶴の群から身を守ることができなかった。彼らの家は泥と羽毛と卵殻で作られている」という。[12]

ユウェナリスは「第 13 諷刺詩」で「ピグミーの戦士は小さな武器を持って行進し，やかましく群れなして急降下するトラキアの鳥たちと交戦する。だが，たちまち敵に伍することもなく，獰猛な鶴につかみ上げられ，鉤爪で宙へと運ばれる。これを我が国で見れば，君は体を揺すって笑うだろう。だが彼の地では，すべての軍勢が 1 フィートの背丈しかなく，類似した戦闘が日々目撃されているにもかかわらず,笑う者は誰一人いないのだ」(167-73行)と歌う。[13]

アイリアノスは『動物奇譚集』で，ピグミーたちが女王ゲラナを神のごとく崇めたあまりに，彼女は増長して女神たちに敬意を払わなかった。これがヘラの怒りを買って，ゲラナは「元の姿からひどく醜い鳥に変身させられ，今で言う鶴と化した上に，ピグミー族と争う羽目になった。彼らが過ぎたる栄誉で彼女を狂わせ，破滅させたからである」と記す。[14]

アテナイオスは『食卓の賢人たち』第９巻において,「鶴(ゲラノス)について,ボエウスによれば,ピグミー族にゲラナという名の有力な女性がいて，市民たちから女神のごとく敬われていたが，彼女自身は本当の神々，特にヘラとアルテミスに軽蔑を抱いていた。ヘラはこれに激怒して，ゲラナを醜い姿の鳥に変え,（ヘラを崇めていた）ピグミーたちが彼女を嫌悪し,憎むように仕向けた」と述べる。[15]

一方リベラリスの『変身物語』では,「ヘラは自分を敬わないことでオイノエーに瑕瑾を見出し，彼女を鶴に変身させた。首を長くし，空高く飛ぶ鳥であるように定めたのだ。ヘラはまた彼女とピグミー族の間で争いが生じるようにした。息子のモプススを切なく思うあまり，オイノエーは家のまわりを飛び，去ろうとはしなかった。だがピグミー族はみな武装して，彼女を追い払った。このためにピグミー族と鶴たちの間に昔も今も戦が絶えることはない」とされる。[16]

近世の英国に目を向ければ,14 世紀の著述家マンデヴィルは『旅行記』第 22 章で，揚子江河畔にピグミーの国があるとした上で，彼らは生まれて半年もすると結婚して子供をもうけるが，寿命は 7-8 年しかなく,「しばしば鶴と戦い，いつもこれと戦っている。彼らは鶴を殺して,その肉を食べる」と記す。[17] さらに 1632 年にアレキサンダー・ロスは『小宇宙の神秘』で「ピグミー族については，牡羊や山羊の背に乗って鶴と戦うなどと，馬鹿げたことが書かれており，これは馬鹿げたことだが，本当かもしれない」と言う。[18]

また 1675 年にケンブリッジ大学のギリシア学者ジョシュア・バーンズは『ゲラニア，古代に論じられたピグミーと呼ばれる小人たちに関する新発見』において，ピグミー族からの視点で「鶴は数え切れ

ないほどいて，種まきの時期になると，群れをなしてやって来ては，農夫の希望と我々の滋養物を略奪する。我々は騎乗と徒歩とで，弓矢，投石器，棍棒を持って待ち構え，全力を奮って鶴に襲いかかる。鶴どもは主に頭と顔を狙ってくるので，我々は致命的な木であるゲラノフォノンで作った兜で頭と顔を守るのだ。鶴がこれに触れると，間違いなく死んでしまう」と描く。[19]

ここまで「ピグミーと鶴の戦い」に関する 10 通りの記述を紹介したが，サットンによれば，アディソンが主として典拠として利用したのは，プリニウスとユウェナリスであるという。前者は戦闘の舞台をインドに置き，ピグミー族が鶴の雛を破滅させたことを開戦の理由としており，また後者はピグミーの勇者が鶴につかまれて宙に運ばれる描写があるためである。[20]

その結果として多くの著述家が戦闘の原因としてあげた，ピグミー族の傲慢な女王ゲラナまたはオイノエーが女神によって鶴に変身させられ，旧家臣たちと争う羽目になったという件は採用されないことになった。インドを舞台にしたことでギリシアの神々が登場しないことも，アディソンの取捨選択によるものであろう。

2．「ピグミーと鶴の戦い」の英訳

アディソンがラテン語で書いた「ピグミーと鶴の戦い」は,18 世紀の間に少なくとも 6 人によって英訳されているので,[21] それぞれについて簡単に紹介しておきたい。まず 1716 年の『ビオン，オウィディウス，モスコス，アディソン氏からのさまざまな翻訳』には「ピュグマイオイの戦，途方もない戦を歌おう，翼を広げた羽毛ある英雄たちも」で始まる，匿名氏の英訳が収められている。[22]

1719 年に出版されたアディソンの『折々に書かれた詩集』に収められた英訳はトマス・ニューコムによるもので，冒頭は「翼を持った戦士たちとピグミー族を，記そう，詩神よ，双方の戦いと死を」となっている。その序文で，ジョージ・シュウエルは「ピグミーと鶴の戦い」を次のように評している。[23]

> 疑似英雄詩に属し，主題は卑近で取るに足らず，詩的な装飾は不可能なように見えるが，表現の輝かしい大胆さと詩行の壮麗さによって，また高遠な等級の作品（叙事詩）から引き出された暗喩，引喩，類似によって，英雄詩にまで引き上げられている。ウェルギリウスは『農耕詩』において，この手法の偉大な巨匠であるが，「ピグミーと鶴の戦い」とはこのような相違があるだけである。すなわち前者は生真面目な光輝を放っているが，後者はそれを模倣したにすぎず，また前者は称賛を呼び起すが，後者は笑いを引き起こすのである。

1724 年にウィリアム・ウォーバートンは「ミルトンの文体を模倣して」と副題をつけた英訳を『散文と韻文によるさまざまな翻訳集』に収めた。冒頭は「武器を取った鶴とピグミーを歌わん，鋭い嘴に対抗する，振りかざした尖った長剣を」で，全編がブランク・ヴァースで書かれている。ただしヘイヴンズは，ウォーバートンのミルトン風語法による「重苦しいユーモア」は笑いを引き起こさないと評している。[24] さらに 1728 年にはウィリアム・パティソンの英訳が，詩人の死後に出版されたが，これは途中で中断した遺稿であるためか，冒頭は「競い合う軍団と死の荒野を歌わん，調べ良き 9 人の詩神よ，聖なる助力を与えたまえ」と，かなり凝縮された英訳になっている。[25]

ウィリアム・ビーティは 1766 年に自らの英訳を発表したが，広告において「英国の読者がかの喜ばしい著者の作品にほとんど親しんでいないことは残念だ。私は原典の精神とユーモアを保つように努力した」と記している。ビーティの訳した冒頭は「ピグミー族と，羽毛ある群れが，野原において致死の戦闘で混じり合った」である。ビーティの伝記作家フォーブスは，この英訳が「原典を超えていないとしても，少なくとも匹敵することは確か」であり，ビーティが「文体と詩行のすばらしい荘厳さ，あらゆるイメージに高遠な筆致を与えている」アディソンの原詩をことのほか好んだと伝える。[26]

最後にサミュエル・ジョンソンの英訳は，若い頃

の習作として長らく埋もれていたが,1936 年にドゥーディが一部を公表し, 1964 年のイエール版全集で全貌が明らかになった。冒頭は「羽毛ある軍団, 翼を広げた飛行編隊と, ピグミー国の悲しい運命を歌わん」となっている。またジョンソンは『詩人伝』で ,「ピグミーと鶴の戦い」を含むアディソンのラテン詩に触れて「母語ならば書こうとはしなかったであろう主題」を扱っているとした上で,「主題が卑近で貧弱でも, 親しみがないために卑しさがまったくない死語ならば, 大いなる利便性をもたらす。ラテン語の朗々たる荘厳さによって, 作者は思考の貧しさや新奇さの欠如を, 読者からはもちろん, 自分自身からも隠し通せるのである」と腐している。[27]

これら 6 種類の英訳はそれぞれ特色を持っているが, 本稿においては, アディソンの生前に出版された『折々に書かれた詩集』所収のニューコムの英訳をテキストに選ぶ。

3.「ピグミーと鶴の戦い」

まずは主題の提示と詩神への祈願で「卑しき英雄たちを導け」(4行)と歌われる。すでに触れたように, アディソンは『スペクテイター』でバーレスクの第 1 例として「英雄の装具をつけた卑近な人物を描く」や「卑俗な人物が高められる」を特徴にあげていた。さらに「ひとつの高遠な調べに恐ろしくも混じり合う／ピグミーたちの勇気と敵たちの軽蔑」(8-9 行) という詩行で, アディソンが卑近な存在を高遠な詩体で歌うというバーレスクを意図していることがいっそう明らかになる。「テセウス」(17 行),「アキレス」(18 行), アイネーイス (19 行) といった叙事詩の英雄たちや, 当時の国王「ウィリアム」(20 行) と並列させるように, アディソンはピグミーと鶴の戦闘を高らかに歌い上げようというのだ。

続いてピグミー族の暮らす土地が紹介される。

幸福なインドがもっと温かい光線を誇り,
微笑みながら, 朝の誕生に顔赤らめるところ,
岩山に囲まれた, 花の咲き乱れる谷間が見える,
訪れる者はわずかで, 常緑をたたえている,
この地を名声高く（天がその名声を阻止するまで）
ピグミーの一族が大きく広がって占めていた。
さまざまな技術で, 倹約的な生活を維持し,
労働する無数の者が混み合う野原に群れていた。
(29-36 行)

アディソンはピグミー族の領土をインドに設定し, これをあたかも地上楽園のごとく描く。またアディソンは戦闘が勃発した原因を, ピグミーが鶴に復讐するために, 雛や卵を破滅させたことに帰している。

しばしば森の中に掛けられた奇妙な住居を
彼の怒りが覆し, 泣きわめく若鳥を殺すのだ。
母鳥は遠くから苦痛を感じながら眺めるのだ,
自分の王国が略奪され, 幼子が殺される様を。
その小さな命は親の罪を償うのだ, ああ,
自分たちのではない罪のために息絶える。
(51-6 行)

鶴の巣が海にあるか, 森にあるかという細部の相違はあるが, アディソンはこの描写においてプリニウスの『博物誌』第 7 巻の記述に倣ったものと推測される。ただし第 10 巻でプリニウスは「先に記したように , ピグミー族は鶴と交戦するが, 鶴が渡りを始めると休戦する」と述べているが,[28] アディソンはこれについては完全に無視した。

だが今や彼らの荒廃した王国は, 見て取れるように,
谷間を耕すことなく, あずまやには人気がなかった。
強靭な小人たちの骨や, 殺された戦士たちが
あらゆる目を打ち, 野原を真白に染めている。
この王国は今や勝者の鶴たちに占領されていた,
彼らは風通しのいい巣で無事に勝ち誇っている。
(37-42 行)

鶴との凄惨な戦闘の結果, ピグミー族は死に絶え, 白い骨や屍を野原に晒すことになった。先行するテキストでは, 鶴とピグミーの間に戦闘が起こったとするだけで, 勝敗については無論のこと, このような

非情な結末が描かれることはなかった。ピグミー王国のかつての平穏な情景と，敗戦後の荒涼たる風景はあまりにも対照的である。ブラドナーは「アディソンの共感は全滅したピグミーの側に全面的に寄せられているように思われる」と述べているが，同感である。[29]

アディソンは続いて，「戦闘詩」の原典となった伝ホメロスの「蛙と鼠の戦い」に触れるが，この描写もことさらに流血の惨状を強調したものになっている。

> 此方の血みどろの戦場に散らばって横たわるのは，
> 蒲の槍で貫かれた，息も絶え絶えの鼠たちである。
> 彼方では，足を引きずる蛙たちが全身血まみれで，
> 深くかすれた嘆きで失った手足を嘆くのだ。
>
> (69-72 行)

別稿で詳述したように，[30]「蛙と鼠の戦い」ではゼウスが遣わした蟹の大軍の介入により，両者は痛み分けに終わるが，アディソンは「機械仕掛けの神」による停戦にはまったく触れないのである。また「蛙と鼠の戦い」には，開戦に至った理由を両軍の将が語る場面，蛙と鼠がそれぞれ用意した武器や装具の描写，さらに天界で戦闘の行く末を見守る神々の会話などが描かれる。ところが「ピグミーと鶴の戦い」にはそのような詩行はほとんど見当たらず，アディソンは血なまぐさい戦闘場面を書くことだけに集中しているのである。

ついに戦闘が開始される。鶴軍はストリモン川やスキタイの湖など各地から増援を得て，空を覆わんばかりの軍勢となって押し寄せる。一方ピグミー軍も長たちに率いられて，剣や槍で武装し，楔形の陣形を取って戦場へと向かう。とりわけピグミーの王（「巨大なピグミー」（111 行）と撞着語法で描かれる）は家臣たちを見下ろすほどの巨人だが，かつての戦闘で負ったむごたらしい爪の痕が顔全体に残っている。「永遠の憤怒が彼の胸を燃やす」（117 行）とあるように，ピグミー王には『イーリアス』のアキレウスが投影されているかのようだ。鶴たちは爪や嘴で王を攻撃するが，王は剣を奮って応戦し，彼の周囲には鶴の死骸がうず高く積まれていく。

その間にも両軍の兵士たちは，善戦虚しく次々と斃れていく。以下の描写は，鶴とピグミーという卑俗な存在が叙事詩の英雄のごとく描かれる，バーレスクの好例と見てよいだろう。

> 此方で勇敢な戦士が傷つきながらも飛び，
> 丸い渦を描いて空を大きく旋回する。
> 敵は実りのない復讐に疲弊すると，
> 爪を引っ込めつつ，怒りの中で息絶える。
> 彼方で英雄の血筋を立派に引いている
> ピグミーの血糊が戦場を真赤に染める。
> 彼の膨らむ胸から深いつぶやきが響き，
> 喘ぎながら倒れ，血まみれの地面を叩く。
> 死の影が彼の泳いでいる目に覆いかぶさり，
> 敵の非常な爪を呪いながら死んでいく。
>
> (157-66 行)

部下たちが戦場の露と消えていく間も，ピグミー王は無傷のままで孤軍奮闘し，鶴の鋭い嘴や悩ませる翼を嘲笑する。鶴たちは王のまわりに群れなして攻撃を敢行するが，有効打を与えることができない。しかし神慮（どの神なのか明示されていない）を受けた一匹の鶴が，上空からすばやく滑降して鉤爪で王の肩をつかむや，宙へと浮かび上がらせる。

> 無数の鶴たちが囚われの王を囲み，
> 喜びながら翼で叩き，地面から運び去る。
> 上空に運ばれ，上昇するにつれて小さくなり，
> 各々のピグミーたちは王の姿を見て嘆く。
> だが溜息も空しく，君主の武器も圧倒されて，
> 君主は最初に征服され，貪り食われた。
>
> (184-9 行)

すでに指摘したように，この詩行はユウェナリスが「第 13 諷刺詩」で描いた場面を踏襲したものであり，他の先行テキストには類似する記述がない。さしもの勇者も鶴たちの餌食となり，ピグミー族にとって最大の危機が訪れる。戦意を失って逃げ惑うピグミーたちに，鶴の軍勢が背後から襲いかかって

掃討していく。

アディソンはピグミー族が滅ぼされていくさまを，ジョーヴの雷撃によってタイタン族が倒れていく場面と比肩し，また「天と贔屓する運命とが／地上の大帝国に或る寿命を定める」(219-20 行）と述べて，ピグミーの国が没落する有様を，アッシリア，ペルシア，ローマといった過去に滅んだ大帝国になぞらえる。繰り返すように，ピグミー族の全滅を描いた先行テキストはない。アディソンはあくまでもピグミー族を失われた民族として描き，彼らを不運な英雄に祀り上げようとしている。

今や，殺された強大な英雄たちの亡霊と混じり，
虚ろな軍勢はエリュシオンの野に広がっている。
もし大切な伝説が許され，名声によって
確立されるのであれば，夜毎に妖精の群れが
実体のない姿で，訝しむ羊飼いに目撃され，
闇をかすめるように飛び，緑地で戯れる。
彼らの胸が戦争の計画で燃えることはもはやなく，
自分たちの苦難も，羽ある敵も忘れてしまう。
代わりに，今や軽快に気まぐれな踊りで
彼らは狭い足跡で花の咲く地面に印をつける。
青々とした芝生に緑色の輪をもたらし，
ピグミー族は絶えるが，妖精という名を戴く。
(225-36 行）

死んだピグミー族が妖精となって真夜中に草地で舞踏に興じるという結末は，彼らを壊滅に追い込んだアディソンの罪滅ぼしであろうか。無論このような結末は先行テキストには記されていない。ところでハーンの指摘によれば，この詩行には『失楽園』第 1 巻の描写が影響を及ぼしているという。ミルトンは同巻 575-6 行で整列した悪魔の大軍勢を「鶴たちに征服された，あの小さな軍団」に喩えている。[31] ちなみに『スペクテイター』第 297 号でアディソンは，ミルトンがキリスト教に基づいた『失楽園』に異教の寓話を挿入するという欠点を犯した例としてこの比喩を挙げている。[32] また「ピグミーと鶴の戦い」の結末をほうふつとさせる詩行も『失楽園』第 1 巻の最後に見られる。[33]

見よ，何たる驚異，つい先ほどまで大地の
巨人族を凌ぐ巨体と見えていた者たちが，
今や最小のドワーフよりも矮小な姿となって，
狭い部屋に無数に群がるさまは，インドの山の
彼方に住むピグミー族か，妖精のごとし，
その真夜中の饗宴を，森の木陰や泉の畔で，
行き暮れた農夫が目にし，見たと夢想する
妖精の類だ，女調停者のごとく頭上に
座していた月が，地上に近づいて，
青白い行路を巡る間に，彼らは歓楽と踊りに
夢中になって，陽気な音楽で農夫の耳を魅了し，
彼の胸は悦びと同時に恐怖で鼓動するのだ。
（第 1 巻 777-88 行）

ミルトンはピグミー族と妖精を同列に置いており，妖精たちが真夜中に浮かれ騒ぐ姿を人間にたまたま目撃されるという点は，アディソンの結末に少なからぬ示唆を与えたものと推測される。余談になるが，ブランク・ヴァースによるウォーバートンの英訳は，この箇所でもミルトンの表現をそのまま借用したものが多い。アディソンが『失楽園』を模倣したという確信の下でなされた訳業であろう。

アディソンの「ピグミーと鶴の戦い」は，先行するテキストにはない要素を加えて，ピグミー族の栄華と没落を対比させながら，彼らが鶴によって壊滅させられる場面を中心に描いている。死に絶えるピグミー族を叙事詩における英雄に擬し，またピグミー王国をアッシリアやローマといった大帝国になぞらえることで，アディソンは卑俗な人物を高めるというバーレスク的な手法でそれなりの成功を収めたと言える。ただしピグミー王が複数の鶴についばまれて落命するなど，過剰なまでに悲惨な描写が多いことも特徴で，読者に笑いをもたらすかどうかは判断の分かれるところであろう。

注

(1) Joseph Addison, “Praelium inter Pygmaeos et Grues,” *Examen Poeticum Duplex, sive Musarum Anglicanae* (London: Richard Wellington, 1698) 158-65., *Musarum Anglicanarum Analecta*, 2 vols (Oxford: Tim Child, 1699)

2: 56-63.

(2) Homer, *Iliad*, trans. A. T. Murray, rev. William F. Wyatt, 2 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1999) 1: 129. ホメロス『イリアス』松平千秋訳 全 2 巻 (岩波文庫 , 1992) 上 87. を参照した。

(3) *Macaulay's Essay on Addison*, ed. Charles Wallace French (New York: Macmillan, 1903) 16.

(4) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Harvard UP, 1932) 210.

(5) Peter Smithers, *The Life of Joseph Addison* (Oxford: Clarendon Press, 1968) 40.

(6) Alexander Pope, *The Rape of the Lock and Other Poems*, ed. Geoffrey Tillotoson (London: Methuen, 1940) 107.

(7) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem*, trans. David Henry Wilson (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 78-9.

(8) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 2: 467-8.

(9) Estelle Haan, *Vergilius Redivivus: Studies in Joseph Addison's Latin Poetry* (Philadelphia: American Philosophical Society, 2005), Asher Ovadiah & Sonia Mucznik, "Myth and Reality in the Battle between the Pygmies and the Cranes in the Greek and Roman Worlds,"*Gerion* 35 (2017) 151-66.

(10) Aristotle, *History of Animals*, trans. D. M. Balme, 3 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1927) 3: 131-3. アリストテレス『動物誌』金子善彦他訳 全 2 冊 (岩波書店, 2015) 上 50. を参照した。

(11) Ovid, *Metamorphoses*, trans. Frank Justus Miller, 2 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1977) 1: 295. オウィディウス『変身物語』中村善也訳 全2巻 (岩波文庫, 1981) 上 225. を参照した。

(12) Pliny, *Natural History*, trans. H. Rackham, 10 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1969) 2: 523-5.『プリニウスの博物誌』中野定雄他訳 全6巻 (雄山閣 , 2012) 2: 300-1. を参照した。

(13) *Juvenal and Persius*, trans. G. G. Ramsay (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1940) 259. ユウェナーリス『サトゥラエ―諷刺詩』藤井昇訳 (日中出版 , 1995) 277. およびペルシウス／ユウェナーリス 『ローマ諷刺詩集』国原吉之助訳 (岩波文庫 , 2012) 290-1. を参照した。

(14) Aelian, *On the Characteristics of Animals*, trans. A. F. Scholfield, 3 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 1959) 3: 257. アイリアノス『動物奇譚集』中務哲郎訳 全2巻 (京都大学学術出版会 , 2017) 2: 258-9. を参照した。

(15) Athenaeus, *The Learned Banqueters*, trans. S. Douglas Olson, 8 vols (Mass. Cambridge: Harvard UP, 2008) 4: 327-9. アテナイオス『食卓の賢人たち』柳沼重剛訳 全 5 冊 (京都大学学術出版会 , 2000) 3: 412. を参照した。

(16) *The Metamorphoses of Antonius Leberalis*, trans. Francis Celoria (London: Routledge, 1992) 70, 150-2. アントニーヌス・リーベラーリス『メタモルフォーシス』安村典子訳 (講談社文芸文庫, 2006) 85-6. を参照した。

(17) *The Travels of Sir John Mandeville*, trans. C. W. R. D. Moseley (London: Penguin, 2005) 140. ジョン・マンデヴィル『東方旅行記』大場正史訳 (平凡社, 1964) 171. を参照した。

(18) Alexander Ross, *Arcana Microcosmi: or, The hid Secrets of Man's Body discovered* (London: Thomas Newcomb, 1652) 108.

(19) Joshua Barnes, *Gerania: A New Discovery of a Little Sort of People, Anciently Discoursed of, called Pygmies* (London: W. G. for Obadiah Blagrave, 1675) 74.

(20) Dana F. Sutton, *The Latin Prose and Poetry of Joseph Addison* (http://www.philological.bham.ac.uk/addison/), Introduction 11. 2005. アディソンは『スペクテイター』第 31 号でもインドをピグミーの居住地としている。*The Spectator*, 1: 130.

(21) Stuart Gillespie & David Hopkins, *The Oxford History of Literary Translations, vol.3 1660-1790* (Oxford: Oxford UP, 2005) 496.

(22) Anonymous, "The Battle of the Pygmies and Cranes. A Poem Written Originally in Latin by Mr. Addison," *Miscellaneous Translations from Bion, Ovid, Moschus, and Mr. Addison* (Oxford: E. Whistler, 1716) 3-15.

(23) Thomas Newcombe, "The Battel of the Pygmies and Cranes," *Poems on Several Occasions. with a Dissertation upon the Roman Poets*. by Mr. Addison (London: E. Curll, 1719) 31-50.

(24) William Warburton, "The Battle of the Cranes and Pigmies. from the Latin of Mr. Addison. In Imitation of Milton's Style," *Miscellaneous Translations, in Prose and Verse, from Roman Poets, Orators, and Historians* (London: Anthony

Barker, 1724) 102-111., Raymond Dexter Havens, *The Influence of Milton on English Poetry* (Cambridge: Harvard UP, 1922) 318.

(25) William Pattison, “The Battle of the Pygmies and Cranes. Translated from the Latin of Mr. Addison,” *Cupid's Metamorphoses or, Love in all Shapes. being the Second and Last Volume of the Poetical Works of Mr. William* Pattison (London, 1728) 165-70.,

(26) James Beattie, “The Battle of the Pygmies and Cranes,” *Poems on Several Subjects* (London: W. Johnston, 1766) 151-66., William Forbes, *An Account of the Life and Writings of James Beattie*, ed. Roger J. Robinson, 2 vols (London: Routledge, 1996) 1: 82.

(27) Dorothy Moody, “Johnson's Translation of Addison's 'Battle of the Cranes and Pygmies,” *MLR* 31 (1936) 60-65., Samuel Johnson, “Translation of Addison's 'Battle of the Pygmies and Cranes',” *Poems*, eds. E. L. McAdam, Jr. & George Milne (New Haven: Yale UP, 1964) 21-7., Samuel Johnson, *The Lives of the Eminent English Poets; with Critical Observations of their Works*, ed. Roger Lonsdale, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 3: 3.

(28) Pliny, *Natural History*, 3: 329.

(29) Leicester Bradner, *Musae Anglicanae: A History of Anglo-Latin Poetry 1500-1925* (New York: Modern Language Society of America, 1940) 222.

(30) 拙稿「パーネルの『蛙と鼠の戦い』」『駿河台大学論叢』第 56 号 (2018) 163-9.

(31) Haan, *Vergilius Redivivus*, 69-70.

(32) *The Spectator*, 3: 62.

(33) *The Poetical Works of John Milton*, ed. Helen Darbishire, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1952) 1: 20, 25.

本論文は科研費の基盤研究 C「十八世紀英国におけるバーレスクと大衆文化」（課題番号 18K00380）による成果である。

また本論の骨子は 2018 年 9 月 1 日に「十八世紀英文学研究会」（ジョンソン協会関西支部）例会（於キャンパスプラザ京都）で発表したものである。